

## <海外短期研修5日目(12/21)>

アメリカ研修5日目、早いもので現地でのプログラムは残すところ3日となりました。昨日とは一転して気温マイナス2度、冷たい北風で耳が痛く感じる真冬のボストンです。

授業開始日の緊張した表情はすっかり過去のものとなり、ずっと前からこの学校で学んでいたかのごとく、笑顔で楽しそうに授業を受け、先生やクラスメイトと普通にコミュニケーションを取っています。昼休みを他国の学生と過ごせるのもあと2回のためか、休み時間には「一緒にランチに行きましょう」と積極的に声をかけて回る姿が見られました。

午後は、ゲストスピーカーを2名教室にお招きして講演会を行いました。

まず1人目は、Brigham & Women's HospitalにてPostdoctoral Research Fellowとして研究をされている、和田剛志先生です。北海道大学医学部卒業後、北大の大学病院にて勤務され、救急科助教の籍を残した状態でボストンに研究留学されています。

講演の中では、ご自身の言葉で「特別優秀ではないただの田舎者」の、「高校生活、大学受験を経て救急救命医になった現在までの経歴と仕事」「アメリカに留学すること」「医師になるという事」という流れで話をされました。

部活や勉強、様々な活動で忙しい日々を送っている生徒達には、和田先生がどのような高校生活を送ってきたかは、非常に興味深いところであり、「高校自体の生活の仕方が今後の人生を大きく左右する」という言葉には非常に大きな重さを感じられました。また、「目の前にあることをしっかりやるーこれが『良い出会い』につながる」「迷ったらやる」という先生の日々心がけていることを生徒達も意識することで、将来につながる充実した高校生活を送れると思われれます。

質疑応答では、仕事の現場で「死」を日常茶飯事として目の当たりにしてきた医師の立場としての、人の命と生き方に関する質問、医療と生命の問題など、倫理観も絡む難しい質問も出ていました。

続いて2人目は、ボストン在住23年、マーケティング会社を立ち上げ、ITと医療の分野でのコンサルティング、海外進出などのお手伝いをされている、松川原康市様からお話を伺いました。

ITとAIが急速に進化し、グローバル化・アジア各国の台頭が激しい21世紀中盤以降、日本、そして世界がどのような方向に変化していくのか。またその中で、いまの高校生が社会に出てからどのような力が必要なのかを、日本を離れたボストンから客観視できる観点で語っていただきました。中でも、戦後から今まで重視され、大学入試でも問われてきた「情報処理能力(基礎学力)」だけでは個性が没し、AIにとって代われ仕事を失う日も遠くない。これを避けるために、「情報編集力、柔軟性、発想力、多面的な視点」を伸ばし、「自分しかできない事」を増やすことが、変化の激しい世界を勝ち残るために必要な力となる。その為に、自ら考える癖をつけること、感性を磨くことの重要性が強調されていました。

生徒たちは、今日からでも出来る、すぐに役に立つ貴重なアドバイスとして、日々意識して学校生活を送ることが重要だと、改めて実感したことと思われます。

いよいよ明日は語学学校での最終日となります。後半に入り、男女とも疲れが見えてきました、そんな中でも、殆どの男子は深夜までホステルのラウンジで宿題をやるなど、出来る限りのことを精一杯やり、少しでも多く学ぼうという姿勢が見られるのは嬉しい限りです。

写真は和田先生、松川原氏の座談会のものです。

